春陽會ニュース

風景と作品

三雲祥之助

スペインの山また山の奥え、病気保養に行ったことがあった。同宿の人々と話し合う様になった頃、日本を離れてもうかれこれ十年にもなろうとしていると言ったら、ホウと感嘆をこめて「それではもう相当前にたでしょうネ」と言って、親指と人差指とをすり合わせておカネの意を示したので、私は苦笑をしてしまった。

多少絵は売ったこともあったが、一銭の貯えもないところか、国から仕送りをうけていた時分だったのでおかくもあったが、そうでなければ、人間十年間外国に出て働いているとなればそうとられるのは当然だと思った。その十年間、決して怠けてはいなかった。寧ろ、寝食を忘れてはいなかった。

しかし、私のした全部というと敗戦後のアッサンとエチュード大であった。それすらも私自身一度も、全部一堂に会して持つことも見ることも、経済的な理由で出来なかった。いや出来る作家は幾人いるだろうか――

そう作品も、その後の十年の作品と併せて大半は、終戦後迄に出した家の防空壕の出水で駄目になってしまった。未発表の油絵洋画二百点以上、パステル、木彫数百枚、ブロンズは勘定できない程の点数だったが、油絵は絵具が離脱しパステル、ブロンズは処理できなかったと見えてアトかもない。

何人ともわかくはないことだろう。火、水、無智に触れればそれでまくなってしまうのだ。その点文学の仕事は羨しいと思ったが、今更羨しがっても何もならない。

汽船ですらその例に漏れなかった。だからとまって、われ〳〵の仕事はをどう東下してはならないと思う。寧ろその復興を描く人が強いたからそその様成が次々に確認されたのだともいえるのだ。

そんなことはともかく、人の数十年の仕事を一瞬にとばす様な危険があるに拘らず、最描きは盛き描いて行きたいのだし、最描きは次から次と続いてくる。そしてどうせ焼かれたり、破壊されたりする文のものだから、絵が描けたか、描けぬか、貴様の眼は何んだとか、あの野郎の眼をえんかとかわめいたり泣いたり、えんかり騒ぎしたりして貪えにはんじて生きているのである。いじらしい極みである。

しかしそこに生活があり、その中より人間を飛躍するような作品も生れてくるのだし、生れているかも知れない。

日本に油絵が入ってより、沢山の人が画を描いたことだろうが、その人達の眼は今どうなっているのだろうか。恐らくこれらの人々の苦しみや、歓喜や、家庭争議や悲劇の結晶の思想と思索に対する雨味しや孤独の業をどになっていたのも多いだろうと思うと、心が寒くなってくる。

成果のよしあしは別としてともかく一度でもその人々の政治であり、何かの犠牲で全部失い、一般の人々の批判にさせして、第一期として残すべきものは残して、第二期、第三期への批判を傳承するような関心ぐらいは一般に持ってもらいたいようにしたいと思う。

総て人間の仕事に、一意専解しようとする関心を不きまい社会というものは、社会という名にふさ値しないものだろう。

春陽会名古屋展

会期に終了

（五月廿五）春陽会名古屋展は六月四日より十五日迄名古屋市松坂屋百貨店に於て開催、連日大人の盛況で一般の評判もよく、各新聞社は競って批評をかきたて名古屋劇場に於てはスライド写真によって作品を六月二日、二日NHKでも放送にわたって会の模様を放送し、大成功を収めて十五日終了、十六日万遺漏なく大阪方え発送した。会期中大阪より前田藤四郎連絡の為来名、又東京より、二度十五日名古屋市丸栄百貨店開催された毎日新聞社合展の連絡兼ねて船出四郎来名、古野飛佐宅に陣取り古野夫妻を別荘番と称し床抜き背日して大ぐらをかき、ウイスキーまどをあつる幾何学的造型論を叫び、大気炎を吐く。

一方水谷清は日本醇厚美金獲得者の血眼の体当も均らず中部日本美術界の客蛮貧そく糸り広しすさまじきファイトと超人ぶりを示し、この所春陽会の二大巨頭によって名古屋美壇がセッケンされていたかの感あり（六、十六）

梅雨はしい雨が今日は一日降っています。幸い名古屋展の会期中は二日間が降った外は晴天